法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

幕末ロシア留学生 市川文吉のこと

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社会労働研究
(巻 / Volume)
37
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
109
(終了ページ / End Page)
142
(発行年 / Year)
1991-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00006811

幕末ロシア留学生　市川文吉のこと

宮永孝

慶応元年（一八六五）にロシアへ派遣された幕生六名の内の一人、市川文吉（ぶんきち）については人名辞典等に短い記事が与えられているが、筆者は最近、生前の文吉を知る人や子孫等に会う機会に恵まれ、新事実に触れたので改めて一文を草する。

市川文吉は弘化四年（一八四七）六月二十三日、広島藩士市川兼恭（かねのり）（通称斎宮（いつき）、のち開成所教授職、学士院会員）の長男として江戸に生まれ、安政七年（一八六〇）四月蕃書調所の仏学稽古人となり、さらに同稽古人世話心得に進み、やがて慶応元年（一八六五）四月八日、ロシア留学の命を受けた。

同年五月末の江戸出発まで、各留学生は渡航準備や家族知人らとの別離の宴その他で多忙の日々を過したことと想像される。が、かれらが江戸を発ち箱館へ向かう前後の消息を伝える史料はきわめて乏しく、詳らかにしない。けれどひとり市川文吉だけは、ある程度出発前後の事情が明らかにされる。

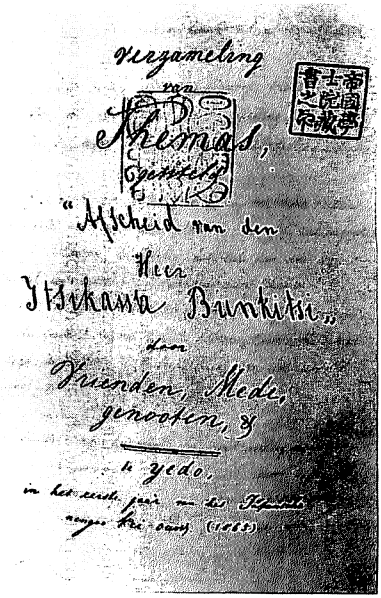
文吉の父開成所教授職市川兼恭（一八一八～九九）は、息子がロシア留学生の選に入った翌日（九日）に早速、在府中の箱館奉行並新藤鉛蔵邸（しんどうしょうぞう）を訪れ謝意を述べ、十一日には父子して緒方家を表敬訪問し、翌十二日こんどは文吉ひとりが新藤邸を訪れ礼を述べている（内藤遂（かのう）『遣露伝習生始末』）。

四月十五日、加藤弘之（のち東京帝国大学総長・帝国学士院院長）の世話で下谷の松本屋において文吉の盛大な壮行会が催され、これには開成所の教授職三十一名が出席し、さらに芸者百名がこれに侍ったという。この送別会の出席者その他は兼恭の依頼により、後日めいめい得意の語学をもって送別の文（オランダ文二十、ドイツ文四、フランス文四、英文八）を書き、それを市川文吉に贈り、一冊に編んだのである。その文集のタイトル（オランダ文）は、

ロシア留学生一行

田中二郎（15）
市川文吉（19）
大築彦五郎（16）
緒方城次郎（22）
山内作衛門（30）
小沢清次郎（13）
左より

慶応二年三月ペテルスブルクで撮ったもの
（内藤遂『遣露伝習生始末』より）



市川文吉の送別文集

Verzameling
van
Themas,
getitels
"Afscheid van den
Heer
Ytsikawa Bunkitsi"
door
Vrienden, Mede"
genooten, &
te Yedo,
in het eerste zaar van het Japansche
neengoo Keiou(1865)

（「友人及び同僚執筆による市川文吉君送別文集」ほどの意）

といった。

この文集は明治四十三年（一九一〇）二月、市川文吉が帝国学士院会員加藤弘之を通じて同院に寄贈したものであるが、その後昭和十年代まで長く帝国学士院（現在の日本学士院）の書庫の中で眠っていた。

のちに名著『遣露伝習生始末』を執筆する医学博士内藤遂は、昭和十三年秋の林若樹文庫の売立のときに図らずも

留学生の一人であった山内作左衛門の遺稿「魯国行」を発見し、それを契機とし、「幕末魯国行」と題して二回にわたって小記事を『東京朝日新聞』（S・14・4・26／4・27）に発表し、世の注意を喚起した。これと相前後して帝国学士院の書庫においてロシア留学生の新資料（市川の「文集」）が発見されたのである。これを発見したのは、当時オランダ商館日誌の翻訳に従事していた原徹郎であった。この文集は現在、日本学士院になく、行方不明である。

市川文吉の送別文集に記されている欧文を大観すると、父祖の国日本の洪恩を忘れず、学業に精を出し、健康に留意せよ、といった主旨のものが大半である。が、この文集の今日的価値としては、むしろ幕末期の邦人の語学力を見る恰好の資料を提供してくれていることである。今その激励の文のいくつかを引いて参考に供しよう。

先ず父兼恭（称は斎宮）が息子文吉に与えたドイツ文は次のようなものである。

Main Sohn!

Bei deiner Abreise nach Russlande, um wissenschaftliche Unterweisugen zu erhalten, werde ich an dich nur einige vornehmste Warnungen zum Andenken an mich beschenken.

Vergiss nicht allzeit die Dankbarkeit gegen unsere Regierung! Dann wirst du bei deinen Studiren dich pflichtmassig betragen.

Folge stets Anmessungen von deinen Lehrmeisteren! Es wirt die vornehmst Nothwendigkeit sein, um deine Wissenschaften zu befordern.

Brecke nimmer, obgleich in einer geringen Sache, die Zusage! Dann wird man dir deine Wörter trauen.

Vermeide alle Schandlichkeiten punktlich! Dann wird es deine Jugend vermehren.

Bewahre deine Gesundheit sorgfaltig! Es wird der Brunnen sein, um sich dauerhaft auf dem Pensum zu befleirssigen.

Und habe es zum Endzwecke, nach verscheidenen Yahren bei deiner Zurückkunft zu erlangen das freudige und ehrerbietige Bewillkommen von deinem mildthätigen Vater.

Y. K. Ytsuki

Yedo den 29sten des anfullender Monaten

vom 1sten Yahren Keywoo

An mainen Sohn

Y.K. Bunkitsi

（大意）

わが息子へ！

お前が学術修業のためにロシアへ旅立つに当って、二言三言戒めとなる言葉を贈るものである。

わが政府（幕府）に対する感謝の念を常に心に銘記すべし！　また学習に際しては汝の義務を果たすべし。

汝の師の意見にはいつも従うべし！　何よりも必要なことは、汝の知識を深めることである。

つまらぬことでも、約束は決して反古にしてはいけない！　そうすれば汝の言葉は人から信用される。

一切の恥ずべき行為を直ちにやめるべし！　そうすれば汝の徳がふえよう。

健康には気をつけるべし！　たゆまず課業にいそしめば、それがよろこびとなる。

そして何年か修学したのち、目的を達して帰国すれば、慈父は汝を喜びと敬意をもって歓迎するものである。

Y・K・斎宮

慶応元年四月二十九日　江戸にて

わが息子Y・K・文吉へ

次に引くのは有名なオランダ通詞堀達之助（一八二三〜九四）の送別文である。以下、邦文による大意だけを述べることにする。〔……〕内は意味不明の箇所。

（大意）

若き市川君へ

わが老いた手にペンを握ったのは、君のめでたいロシア行の祝詞と御忠告を申し述べるためである。

ヨーロッパのすべての学術の枝まで徹底的に究め、その伝播がわが日本帝国内の津々浦々まで及ばんとするため、何人かの生徒が選ばれ、今君はその企てのためにロシアに赴かんとす。

ああ、わが若き友人よ！　かかる重要かつ名誉ある任務を与えられた者がいただろうか？

ああ、君が伝習生となる時期が正に訪れた。君は常に好学心にあふれているが、その学問の基礎は、君が運よく任務を果すことができれば成るものである。たとえ不幸な出来事と遇おうとも、それを恐れてはならない。なぜならわれらの天帝がすなおな生徒の悩みに耳を傾け、どこにいても守ってくれるからである。われらの天帝はいつもやさしい眼で君を見守り、また君の両親は絶えず慈愛をもって包んでくれる。ロシアにおいて君がなさねばならぬ主要な任務とは何なのか？　ただ勉学に勤むだけのことなのか。諸君らは声高らかに自信をもって諸君らの立派な先生に師事したまえ。師匠は君らを美徳の道へと導いてくれよう。諸君らが任務を果たしたのち、すみやかに帰国すれば、高度にまで修めたいと思っていた学術についての知識がわが国に持たらされ、われわれのヨーロッパ風の学校（開成所）へも敬意が払われよう。それは君にとって名誉となるばかりか、われわれ同僚や君の最愛の御両親にとっても大きな喜びともなるのである。

一八六五年五月二十四日

敬意を表して

堀　達之助

開成所教授方として当時フランス語を教えていた入江文郎（一八三四〜七八）もまた、堀達之助と同じようにペン字の見事な筆跡で次のような内容の送別文を綴っている。

（大意）

市川文吉君へ

開成所のフランス語学校で君の知己となる光栄に浴してから五年になります。私は君に惹かれました。私は君のおかげで自分のできの悪さを伝えねばならぬが、いつも君の物わかりの早さと優れた能力には驚かされました。

今、君は大君殿下によって伝習のためロシアへ遣わされるが、私の心の中は悲喜ごもごもなのである。なぜなら、最良の友の一人がわずか一カ年ほどの期間とはいえ、われわれのもとを離れるのは非常に残念なことであるからである。サンクト＝ペテルスブルクで幾人もの学者と会えることを期待する大きな喜びがある限り、君は何らかの能力〔……〕、考えを深めることであろう。我が国の文明は、君のもとで〔……〕することであろう。

大君殿下は〔……〕

さらば、市川君よ。元気でいたまえ。そしてよく学んで欲しい。この言葉を献呈する所以は、ロシア滞在中に思い出してもらうためである。かの国では私の忠告を思い出せば、決して任務をおろそかにすることはないのである。ご成功を祈ります。君が一日もすみやかに帰朝することをお待ち致します。

慶応元年五月二十八日（キリスト紀元一八六五年七月二十日）　祝詞を述べる。

入江文郎

次に引くのは、慶応二年のイギリス留学生の一人――開成所英学教授手伝出役・外山捨八（正一、一八四八～一九〇〇、のち学士院会員、東大総長）の英文送別文である。

（大意）

わが最愛の友

市川文吉君へ

親愛なる友よ！　元治二年、わが日本政府はわが国におけるロシア語と科学との発展のために学生をロシアへ派遣することにしたのである。

ロシアを除くわが国と付き合いのあるほとんどのすべての国の言語と科学はある程度識られていても、ロシアらのそれらは、わが開成所においてすら、ほとんど識られていないのである。だから開成所の教授らに伝習生を選ぶ命が下り、大勢の生徒の中からわずか五名だけ選ばれ、貴君もその内の一人とみなされ、これよりロシアへ旅立とうとしています。貴君はロシア語と科学とを修めて帰朝なさることと思います。というのは、貴君はすぐれた、天性の才能に恵まれているばかりか、勤勉な人であることを知っているからなのです。

もし〔……〕

健やかな旅行をお祈りいたします。

慶応元年五月二十五日

親愛なる友人より

外山捨八

各国語で綴られた送別文の大意を四つ選んで引用したが、原文は、今日から観れば破格な語法、文法上の誤りも少なからず見られ、文意が明瞭でなく、概して稚拙な文章といい得るであろう。が、幕末期といった時代を考慮に入れれば、努力の跡がよくにじんでおり、むしろよく書けているといわねばならぬ。

再び市川兼恭の息子に対する送別の辞に戻ると、かれが文吉に向って、幕府の恩顧を忘却することなく、義務を怠らず、約束をたがえず、破廉恥の行為をなさず、健康にも留意して、学成って帰国すれば、汝の慈父は汝を衷心より歓迎する、と結んでいるが、最後のくだりあたりに横溢しているのは、わが子を思う父親の愛、まごころである。

いずれにせよ、文吉はロシアに赴くとき、この寄せ書き（「文集」）を持参したものらしい。

下谷の松本屋において文吉の壮行会が開かれて約十日後の四月二十六日、父兼恭は越後屋呉服店（後年の三越デパート）で文吉の洋服（燕尾服風のもの）をあつらえ、その翌日には家族が打ちそろって洋学者柳川春三（一八三二

開成所教授職　市川兼恭

市川兼恭の妻とみと曾孫志奈
（飯田志奈氏蔵）

開成所教授職斎宮惣領
同所仏学稽古人世話心得　市川文吉

此度魯西亜国に伝習として被差遣もの也

慶応元年五月　御名（徳川家茂）

〜七〇、開成所教授を経て大学少博士）宅を訪れ、記念写真を撮った。

五月朔日、市川文吉は幕府より次のような証書を下付されたが、これは今でいう旅券（パスポート）であったと考えられる。

徳川幕府が「海外渡航差許布告」（渡航解禁の布達）なるものを公布したのは、慶応二年（一八六六）四月九日のことであり、これ以後身分を問わず、お上へ届け出、政府（幕府）の免許状・印章（〝日本政府許航佗邦記〟とあるもの）を得られれば、だれでも条約締盟国（八カ国）へ出かけることができるようになった。ともあれ、慶応元年のロシア留学生六名こそ、幕府発行の旅券を与えられた第一号といえよう。

またこういった証書とは別に、在府の者五名は四月十五日、閏五月十五日、同二十四日の三回にわたって幕府より支度金として金三百両交付されたのである。その間にも、江戸出発の日がだんだん近づいて来た。閏五月二十四日、文吉の父兼恭は開成所の親しい友人四、五名と息子の同行者――緒方・大築・田中・小沢ら四名を別々に宴に招いたのである。

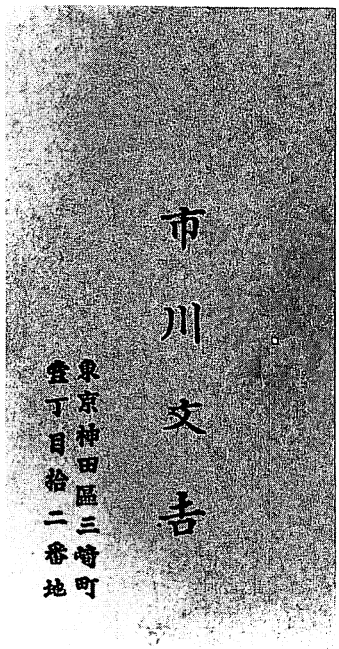
かくして慶応元年七月二十六日（一八六五・九・一五）、市川文吉は他のロシア留学生五名と共に露艦ボカテール号に乗り箱館を出帆、三津の浦（広島県南部――安芸（あきつ）津町）、長崎、香港、シンガポール、バタビア、サイモンズタ

ウン（南アフリカ）、ケープタウン、セント・ヘレナ等に寄港したのち、翌慶応二年一月二十七日（一八六六・三・十三）南イングランドのプリマス港に到着した。箱館出帆後約七カ月目のことである。

同年二月九日、再びボカテール号に搭乗しプリマスを出帆、同日の夕方北仏のシェルブール港に到着。その後陸路パリへ向かい、二月十二日（三・二八）同地に到着。パリで一泊の後、陸路ペテルスブルクへ向かう。途中、ベルギー、プロシア、ポーランドを経て二月十六日（四・一）最終目的地ペテルスブルクに到着した。同日、初代駐日箱館領事ゴシケヴィッチの息子ワジメルの出迎えを受け、晩さんを供されたのち予め用意された借家に案内された。以後、幕生六名はこの家で暮らし、出張教師より授業を受ける。

慶応三年三月一日（一八六七・四・五）、学生取締山内作左衛門は、病気を理由に遣露使節小出大和守一行と共に帰国の途につき、翌慶応四年五月二十七日（一八六八・七・一六）市川文吉を除く、ロシア留学生四名、ペテルスブ

若き日の市川文吉（飯田志奈氏蔵）



市川文吉の名刺（浅海福子氏蔵）

ルクを発し、帰国の途につく。

文吉は仲間の帰国後、プチャーチン提督の家に引き取られ、文筆家ゴンチャロフ外三名の教師からロシア語・歴史・数学などを学んだ。のちプチャーチン宅を出、どこかの家に間借りしたものか。やがてシュヴィロフという名のロシア女性と結婚し、アレクサンドル・ヴァシレヴィッチ・シュヴィロフという男の子をもうけた。

明治六年（一八七三）九月、約八カ年にも及ぶロシア生活に終止符を打ち、妻子を残して単身帰国した。同年十二月、文部省七等出仕を命ぜられ、新設の東京外国語学校魯語科の教師となった。『東京外国語学校沿革』（昭和七年十一月刊、非売品）の「附三、職員」という項に、ロシア語教員としての文吉の名が見え、「市川文吉　（就職年月）六、一二　魯語」とある。同書の「附五、東京外国語学校官員並生徒一覧（明治七年三月）」には、すでに文吉の名が無いことから考えて、就任後間もなく職を辞したものか。

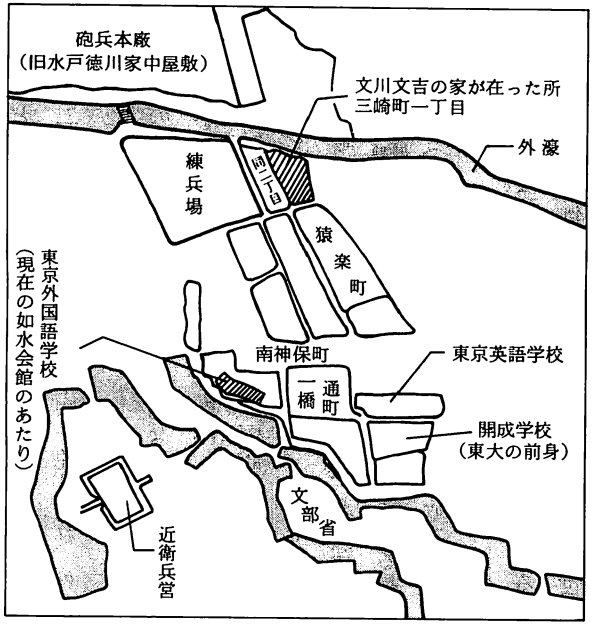
翌明治七年（一八七四）二月外務省二等書記官となり、一等書記官花房義質（よしただ）、二等書記官中村博愛らと共に、特命全権公使海軍中将榎本武揚に随行して再びペテルスブルクに赴いた。

当時の日本公使館はネヴァ川畔にあるビィビィコフというロシア人の大邸宅を年九千ルーブル（約六五〇〇両）で借りていたもので、門番・料理人・別当・小使ら十名の外、榎本以下五名の日本人が在勤していた。榎本春之助の写本に「在魯公使館創立当時在勤員」として次のようにある。

海軍中将兼特命全権公使　榎本武揚　静岡県士
外務大函兼二等書記官　花房義質　岡山県士
魯語通弁　市川文吉　東京府士

外務二等書記生　内藤忠順　静岡県士
留学生　寺見機一　岡山県士
同　西　徳次郎　鹿児島県士

これら在外公館に勤める日本人六名は分宿せず、公使館内に一緒に住んでいたようで、「日本人は公使館附属花房書記官始外三人手前とも通計五人一所に住居候」（明七・九・二〇付榎本書簡）とある。文吉の主な仕事は会談の際の通訳や外交文書の翻訳であったと思えるが、榎本のオランダ留学時代の恩師ポンペ（医師）もまた、日本公使館付医師兼学術調査官の名義で約二ヵ年在勤した。露都の日本公使館に勤務すること約五年、文吉は榎本公使が帰国する際も同行し、共にシベリア経由で日本に帰っている。一行は、明治十一年（一八七八）七月二十六日ペテルスブルクを出発し、モスクワ、ニジニーノヴゴロド、カザン、ペルム、エカテリンブルク、トムスク、イルクーツク、キャフタ、チタ、フラゴヴェスチェンスク、ハバロスク、ウラジオストック、小樽、札幌、箱館等を経て、同年十月二十一日東京に帰着した。約三ヵ月にも及ぶ旅行中、文吉は榎本



の通訳などを勤めた。

明治十二年（一八七九）二月、本官を免ぜられ、外務省御用掛兼文部省御用掛となり、東京外国語学校魯語科教員を兼務した。

明治期の小説家・翻訳家として有名な二葉亭四迷（本名・長谷川辰之助、一八六四〜一九〇九）が、東京外国語学校の魯語学科に入学したのは明治十四年（一八八一）五月のことで、同校には明治十九年（一八八六）一月まで在籍し、中途退学した。が、入学当時、外国語学校のロシア語教師であったのは、「日本人では市川文吉、古川常一郎氏の二人で、その外に助教師が三人あった。外人では露人のアンドレー・コレンコと呼ぶ人がいた」と、二葉亭の同級生であった藤村義苗（一八六四〜一九三四、幕臣藤村知一郎の長男、のち生命保険会社協会専務理事）は、回想している（坪内逍遥編輯『二葉亭四迷』内田魯庵各方面より見たる長谷川辰之助君及其追懐）。

大庭柯公（一八七二〜一九二一、山口県士族大庭景明の三男、のち読売新聞社特派員として革命後のロシア事情調査のため入露したが、消息を絶つ）も、二葉亭の追悼号に一文を寄せた一人だが、市川文吉と古川常一郎と長谷川辰之助を〝露語の三川〟と呼び、次のように語っている。

「古川先生は佐賀藩士で少年時代は大隈伯母堂に世話になった人である。樺太談判の通事に当った市川文吉先生と共に実に露西亜語学の二大先輩である。妙なことはこの両川共に有名な頑固屋で苟も上長者（身分の高い人——引用者）に屈しない。（中略）硬直なる古川先生は貧乏死に死なれた。市川先生は飯田町に居られたが多分未だ存命であらう」（前掲書）

市川や古川といった日本人教師たちは、「いずれも社会的野心を持たず、学識よりむしろ性格の力で学生たちに感化をあたえる」人々であったらしい。中村光夫の『二葉亭四迷伝——ある先駆者の生涯』講談社）にも多少市川文吉

についてふれられており、それには――、

「（前略）酒脱な江戸っ児肌が十数年にわたるペテルスブルグ生活でロシア化した異様な性格の持主であったようです。幕臣である彼は明治政府の高官たちにたいして口に云えない憤りと蔑みを抱いていたかも知れません。また十九世紀後半のペテルスブルグの社交界を垣間見てきた彼には、明治の日本など立身に価しない社会と映ったのかも知れません。いずれにせよ、彼は明治十八年の旧外語廃校後は、黒田清隆、榎本武揚などの顕官に知己が多かったにかかわらず、一切官途への望を絶って、昭和二年に伊豆伊東で八十歳の天寿を全うするまで、四十年近い歳月を隠遁のうちにおくり滞露中に知りあった者のほかほとんど交際はなく、革命後に亡命ロシア人が銀座で花などを売っているのにひそかに金品をめぐむのをたのしみにしていたそうです」とある。

同十七年（一八八四）文部省御用掛、翌十八年外務省御用掛を免ぜられた。明治十九年（一八八六）六月二十三日黒田清隆がシベリア経由で欧米巡歴の途に上るとき、文吉は通訳として随行し、翌二十年四月二十一日帰国した。その後官途につかず、また世間との交渉を絶つようになり、父兼恭の死後、熱海や鎌倉や小田原に隠棲し、晩年は伊豆の伊東に余生を送り、昭和二年（一九二七）七月三十日の昼ごろ、八十一歳の高齢をもって逝った。文吉はロシア留学生の中でも最も長生きした一人である。

市川家の菩提寺は文京区八千代町の念通寺であり、墓碑は現在雑司ケ谷霊園の管理事務所に比較的近い所（一種四号B三側）にある。墓石の表面に「市川家之墓」とあり、その裏に兼恭の父母の名をはじめとし、市川家一族の氏名・生没年月日が刻まれている。

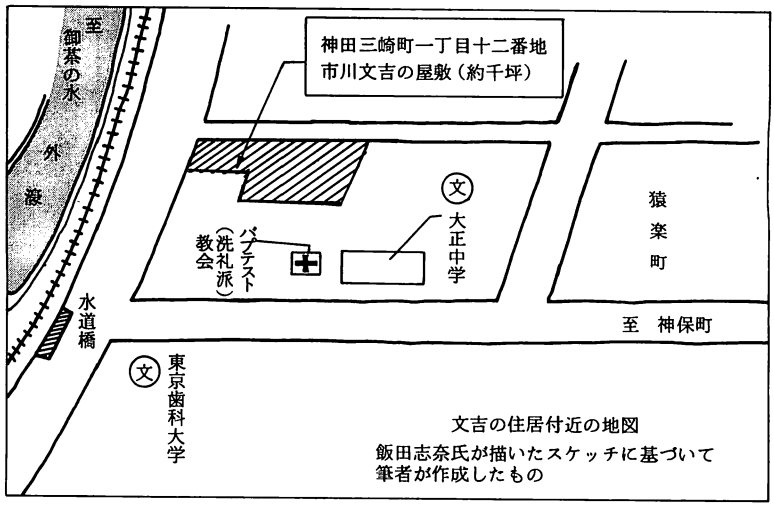
*

筆者は平成二年の盛夏、文吉の子孫とお会いすることができ、かれにまつわる数々の新事実を識ることができた。取材に応じていただいたのは、文吉の孫・飯田志奈（旧姓二橋）と曾孫・浅海福子（二橋雪の次女）の両氏である。飯田志奈さんは、明治三十七年（一九〇四）八月三十一日生まれ、当年八十六歳である。神田三崎町一丁目にあった市川兼恭（文吉の父）の屋敷（千坪）で生まれ、仏英和女学校（現在の白百合学園）を卒業後、大正十二年（一九二三）十二月医師飯田博（東大医学部卒）氏のもとに嫁した。御主人は初め旧満州の遼陽、次いで撫順、瀋陽、営口、新京の各病院長を勤め、戦後しばらくして帰国した。

文吉の妻は、旧姓小林もといい、造り酒屋の娘で、十六歳のとき嫁に来た。文京区白山あたりに住んでいたものらしい。文吉とは九歳ちがいであり、安政四年（一八五七）十一月六日の生まれである。文吉が亡くなる一年前（大正十五年（一九二六））五月二十四日神田において癌で亡くなった。

大正3年ごろ，上野精養軒で撮った写真。左より文吉，二橋季男，アレクサンドル，政（文吉の娘）（飯田志奈氏蔵）

雑司ヶ谷霊園にある市川家の墓（筆者撮影）



文吉の住居付近の地図
飯田志奈氏が描いたスケッチに基づいて
筆者が作成したもの

顕官にこびず、孤独嫌人癖があった文吉は、四十代で早くも隠棲生活をはじめ、神田三崎町に千坪ある土地を人に貸し、その上がりをもって暮らしていたものらしい。当時、文吉の妻もとの家計費は一カ月六十円ほどであった。文吉は別に小遣を必要になったときは、神田にとりに来た。明治三十二年（一八九九）以後、湘南地方に余生を養っているが、最初は熱海に借家（有名な〝お宮の松〟のすぐそば、旅館の持物）を求めて暮らした。志奈さんは、四歳までこの熱海の家にいた。次いで鎌倉に移り、駅前（警察署のうら）に借家を求めたが、熱海と鎌倉の家は、いずれも間数が四つ以上もあり、文吉は必ず一部屋を独占し、必ずメイドもいた、という。

やがて文吉一家は居を鎌倉より小田原に移し、しばらく十字町の借家に暮らしたのち、會我子爵の世話で、大久保村板橋（現在の小田原市板橋）に家と農地七百坪を購入し、のちに畑地をさらに買い求めた。そして当地において土地の者から農業を学び、また教えてもいた。米を除く野菜（カリフラワー・レタス・トマト・キュウリ・ナス）等を自分で作るようになり、晴耕雨読の生活をはじめた。野菜の種は横浜の貿易商から取り寄せたものである。十字町の借家に暮らしていたとき、家の前に榎本武揚の別邸があり、文吉はそこによく遊びに行った

という。文吉は小田原に十年以上滞在した。

関東大震災（大正十二年九月一日）の後、文吉は後述の伊東の二橋別荘に移った。志奈さんや福子さんの話によると、文吉はおもしろいエピソードの持主であったことが判かる。文吉は新しいもの好きで、写真機やラジオが珍しかったころ、逸早くそれらを求めとくに撮った写真は暗室で自分で現像までした。また鎌倉にいた当時、孫たちのためにパンを自分で作って食べさせた。洋服をあまり用いず、和服を着ていることが多かったが、和服の表は木綿、裏地は絹であった。これは江戸ッ子風の着物の好みであった。孫たちをかわいがったし、よく映画などへも連れて行った。孫には大体一人ずつ必ず婆やが付けられていた。

日本人絵師が描いたオリガ・プチャーチンの肖像
（戸田村立造船郷土資料博物館蔵）

文吉は義侠心に富み、困窮している者の面倒をよくみたらしい。清水次郎長が好きで、じっさい付き合いもあった。酒はたしなまなかったが、タバコは吸った。アユの時期になると年一回必ず釣りに出かけた。読書をよくしていたが、洋書などをよみ、外国語（ロシア語？）できれいな文字を書いていたという。語学は四カ国語（中国語・ロシア語・フランス語・英語）できたという。鎌倉にいたころ、弁髪の清国人の来客があり、客人にコーヒーを出し、中国語のようなもので話をしていたのを志奈さんは今も覚えている。また文吉は碁を打つのが好きであった。

ロシアに残して来た息子アレクサンドルには、仕送りをつづけた。アレクサンドルの来日は、これまで一回きりとされていたが、じつは二度日本に来ているのである。第一回目は大正三年（一九一四）ごろのことで、このときは日本に遊びに来たもので、上野精養軒で撮った写真が残されている。第二回目は、文吉が亡くなる約一ケ月ほど前のこ

とである。オリガ・プチャーチナは、文吉がペテルスブルクに滞在中やっかいになった、あのプチャーチン提督の娘である。が、オリガ（皇后仕女官）は、父の死後（一八八三年（明治十六年）十月二十六日パリで八十歳で亡くなった）、来日した。けれどその正確な時期については不明である。

文吉は彼女のために神田の敷地内に二階家を建ててやり、住まわせた。オリガはマリアという名のメイドを伴っており、マリアは裁縫が上手であった。文吉の妻もとはこのマリアから洋裁を習い、やがて文吉のワイシャツや娘政の洋服までも器用に仕立てるようになった。オリガのその後については詳らかにしない。大正十四年（一九二五）の暮、文吉はいちど倒れた。がその前のある朝、火ばちに手をかざしていたとき、指が焦げているのにも気がつかずにいたという。すでに体の左半分の感覚が無かったもののようだ。そして、

――おれは大正十四年でおわりだ。

と、語ったという。

この話は、浅海福子さんが母雪子さんから聞いたものである。

生前、爵位の話もあったが、思うところがあって辞退した。

*

従来、市川文吉の晩年については、隠棲地伊東で亡くなったこと以外にわからなかった。が、生前の文吉を知る女性が今も健在であることを知り、晩年のかれの暮らしぶりの一端を知ることができた。平成二年の盛夏、筆者は伊東市教育委員会社会教育課に勤務する竹下光氏と共にその女性宅を訪れ、貴重な話を聞くことができた。

俗世間をのがれて伊東で静かに暮らす文吉の世話をしたのは、現在伊東の新井区に住む石井はるさんである。石井

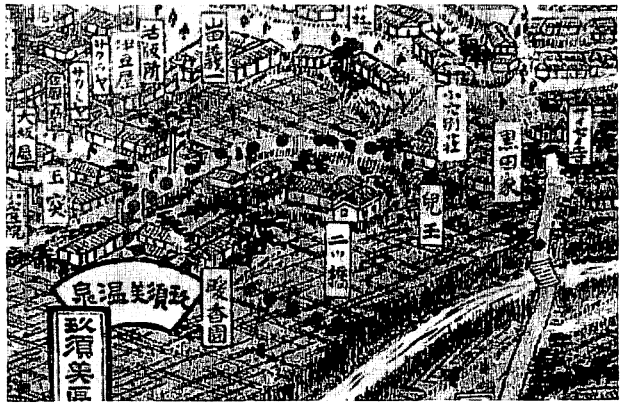
はるさんは明治四十二年二月三日生まれ、当年八十一歳である。はるさんは大正十四年（一九二五）の春四月、現在の竹の内一丁目三の十二あたりにあった二橋季男氏（日本郵船社員を経て上海の郵便局長）の別荘（通称「二橋別荘」）に奉公に出、昭和二年（一九二七）八月まで勤め、翌三年二月嫁に行った。二橋氏の別荘は敷地が二千坪ほどもある宏壮なもので、敷地内には母屋や茶室の外、監理人（留守番）の住居、機織り場、仕事場、物置などがあり、風呂場だけでも三カ所（主人家族と使用人用）あったという。また邸内には鶏小屋もあり、ブドウ・ミカン・イチジクなどの果樹も栽培されていた。敷地の周囲はいけがきをめぐらし、中には水田もあった。別荘のとなりには畑と暖香園ホテル（現在の「暖香園」）があった。

二橋別荘の名残りは、現在の竹の内一丁目三の十二に住む金子能男氏の住居の庭に見ることができる。同氏が今の番地に住むようになったのは昭和三十九年（一九六四）からで、二橋別荘の建物の一部が昭和五十四年（一九七九）頃まで在ったという。とくに文吉が息を引き取った茶室は、昭和五十三年に取り毀わされてしまった。ただ当時と変わらぬのは庭園であり、池などは昔のまゝなのである（金子能男氏談）。

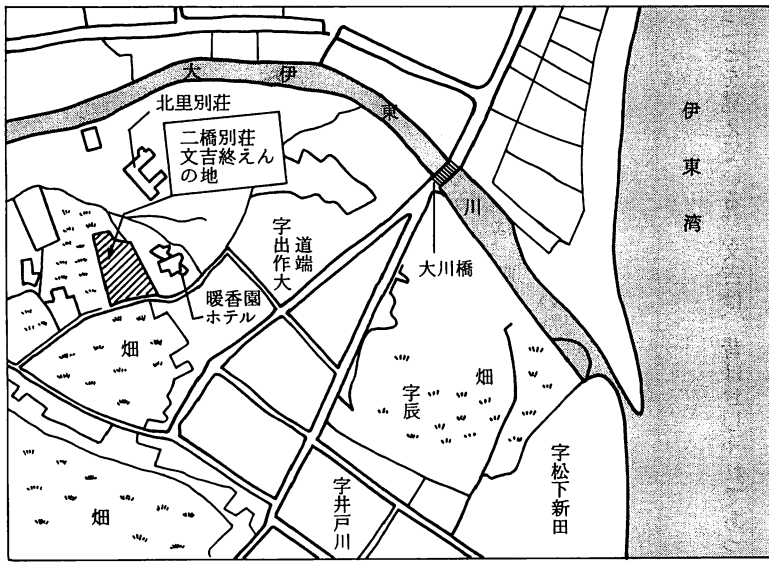
小田原時代の文吉については詳らかにしない。が、大正の末頃には小田原を引き上げ、伊東で暮らしていた。文吉夫婦には政という娘（跡見女学校卒）があり、その夫が二橋別荘の持主二橋季男氏なのである。季男氏は慶応義塾大学卒の当時六十歳代、妻は当時四十四、五歳位で、この夫婦には子供（娘）が四人おり、皆仏英和女学校（現在の白百合学園）に通っていた。東京の住居は、神田三崎町一丁目にあった。文吉の母とみは背の高い、やせすぎの人であった。文吉も、

――背の高い、体の大きな人（六尺位、骨ぶと）であった。

と、はるさんは語った。



中央の建物が二橋別荘（「豆州伊東真景」より）



「伊東温泉場全図」（昭和5年12月発行，伊東市立図書館蔵）を基に筆者が作成したもの

文吉の妻は母屋の方に、文吉は初め別荘番である佐瀬守之助夫妻の住居の離れで一人で暮らし、のちに邸内の茶室の二階に移り、そこで寝起きしていた。

文吉は小田原から蜜蜂を持って来、敷地内に巣箱を置き、採った蜜を自分でも食べたし、人にも与えたという。だから、はるさんの眼には文吉は、

——百姓じいさん。

のように映った。

また文吉は釣が好きで、よくいそづりに出かけた。はるさんは当時、文吉の経歴については、

——ロシア語の先生であったことは聞いて知っていた。

ということで、それ以外は知らなかった。

文吉は無口な人で、人を寄せつけることもなく、ひとりでひっそりと暮らしていた。

はるさんは、文吉が茶室の二階で洋書を読んでいる姿を見ているが、それがどんな本であったか判からなかった。ロシア時代の話もついぞ聞いたことがない、という。用事があるときは、呼び鈴が鳴るので、はるさんが二階に上ってゆく。三度の食事は、はるさんが運んだが、文吉はふつうのものを食べていたという。酒は飲まなかったが、タバコは吸ったらしい。

あるとき文吉から、

——バリカンで頭を刈ってくれ。

と云われたので、はるさんは慣れぬ手つきで刈ったことを覚えている。文吉は、昔はおしゃれであったが、晩年は

——なりふりかまわぬ人。

であったという。

亡くなる一カ月ほど前の昭和二年六月、文吉はロシアに残して来た息子アレクサンドルと再会を果たした。が、実はアレクサンドルを東海バス本社まで迎えに出たのは、はるさんと孫娘の二橋雪さん（三女）であった。

伊東線が開通したのは、昭和十三年のことで、当時はまだ鉄道はなく、唯一の交通手段はバスであった。アレクサンドルを案内したのは、東京外国語学校時代のかつての教え子鈴木要三郎（明治十七年七月卒）であった。

――この人（文吉）は私の恩師です。

と、鈴木が語ったことを、はるさんは今もきのうのことのようによく覚えている。

のちに海軍の将官になる鈴木要三郎は、

――おとなしい、静かな人。

であったという。

アレクサンドルらは熱海から伊東までバスでやって来た。アレクサンドルは大男であった。日本語は、「ありがとう」とか「おはよう」が云えた程度であり、時には文吉の娘政子のことを「お政さん」と呼んでいた。

息子と思いもかけぬ再会を果たした文吉の喜びぶりは筆舌に尽しがたいもので、文吉は

――よろこんで抱擁し、涙を流して喜んだ。

ということである。

このとき『東京日々新聞』は、市川親子の再会を記事にし、同年六月二日付の夕刊に掲載した。その記事には所々誤りや事実を歪曲した箇所がみられるが、参考のために全文を掲げる。――

はるゞ〳〵ロシアから
病篤き父を訪ねて
来朝したシウエーロフ氏

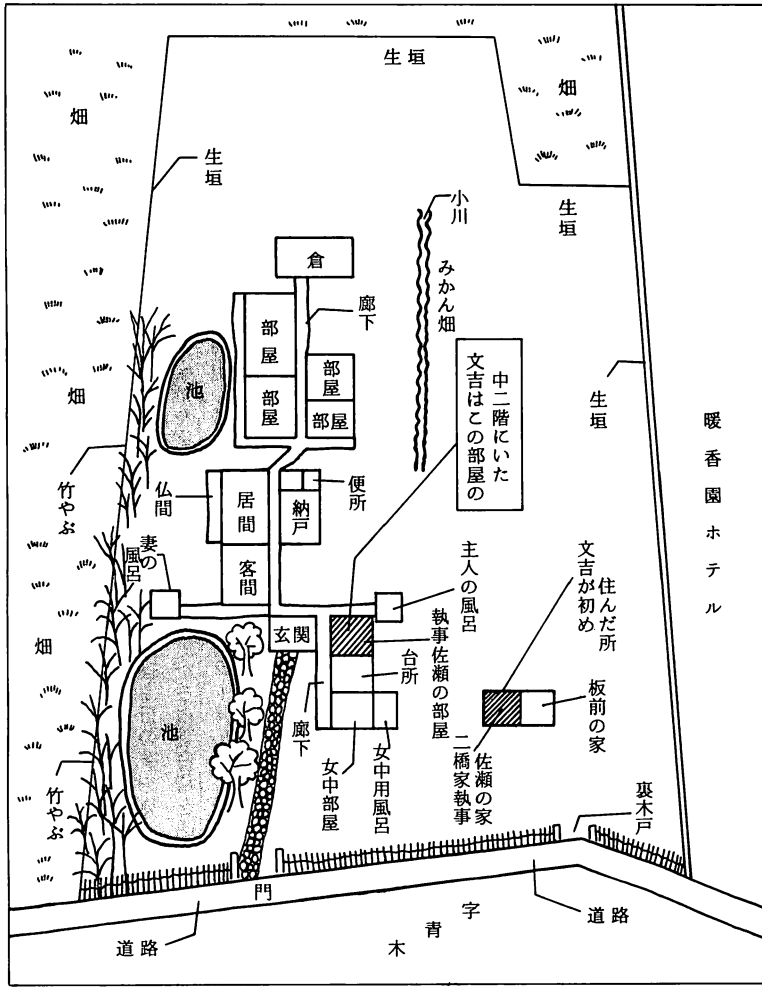
四十五年ぶりに愛児を迎へて
市川文吉翁の涙

はるゞ〳〵とロシアから四十五年ぶりで逢ふ父をたづねて有名な外交学者シウエーロフ氏（五四）があわたゞしく来朝した。父市川文吉翁（八一）は明治初年の唯一のロシア通として知られた人、いま伊豆伊東に病ひは重い、その枕辺に相見た父子の対面こそ、たゞうれし泣きで終始したといふ

文吉翁は浅野家の藩士であった（父兼恭の誤り――引用者）が、十七歳（十九歳の誤り――引用者）のときに幕府の留学生として髪を大たぶさに結ひ木綿の紋付に大小をさし小倉の白袴をはいて盟友五名と共に函館からロシアの軍艦に便乗して露都に向った。航海十一ケ月余（約半年の誤り――引用者）、漸くフランスへ上陸した。

翁が安政の末に伊豆下田へ入港した露艦パラウダ号（パルラダ号――引用者）の艦長プーチヤチン伯を訪ね艦上で当時ロシア第一の小説家ガンチヤーロフ氏と会った縁故で、殊にこの人達と交際してゐたがその中に徳川幕府の覇業敗れて世は明治の政府となり幕府の留学生に対してはばったりと学費が絶えたので、他の五人はそのまゝ日本へ帰ったが翁一人はプ伯の好意によってその家に寄ぐうし勉強をつゞけてゐるうち明治七年日本の公使榎本武揚がやって来たので公使館の書記官となった。

この前後に若い日本のサムライ学生はロシアの一美人と恋し恋された。間もなく二人の間には愛すべきシウエーロフ氏が生れた。翁はその子の成長を楽しみながら日本との間を幾往復かして国事に奔走してゐた。榎本公使の帰国に際してはペテログラード（ペテルスブルク――引用者）からウラジオ（ストック――引用者）まで雪のシベリアをわざ〳〵馬ぞりの長い旅を



伊東の「二橋別荘」の見取図

飯田志奈氏が描いたスケッチを基に
筆者が作図したもの

つゞけた。更に黒田清隆がロシアへ派遣される時はこれをウラジオに迎へてここからまた吹雪をついて露都へ馬橇を走らせつゞけ伯と相抱いて生死の境をさまよった事も幾度かあった。

愛児は十歳になった。翁は日本外務省へ仕へる急命に接し、取る物も取敢へず日本へ帰った。雪の降る夜、ストーブの前で、愛する女と、愛する児のためにその金髪を撫でて、再会の日を約して互に終夜を泣き明かした。思へばこれがそのロシア娘との悲しい別れ、そのいとし子とは東西相へだてゝ四十五年、互に逢ふ日の夢を見つて千山万水をへだてつくして来た。

翁は開国以来、殆ど毎日のやふに手紙を書き、子供のために少からぬ養育費を送りつづけたが、周囲の事情は翁をして日本の家庭を結ばせるやふな事となり沢山の子供も出来た。ペテログラードから『母の病気が重りました。どうぞお父様一目でも母の病床をたづねて下さい』と血の出るやうなシウェーロフ氏の急信は届いたが、翁はどうしてもロシアまで行く事は出来なかった。やがて数週の後、その母の死は再び氏のペンによって報ぜられた。

母すでに亡く、父は遠い日本に——この淋しさの中にシ氏（シウェーロフ——引用者）はやがてペテログラードの法科大学を卒業し新聞記者として活躍の日を送る中に、その刻苦は氏をしてロシアの有数な外交学者とし、十歳にして父にその頭を撫でられた子も、今や五十五歳、人生半をすごした。それでも父としての音信、子としての音信は絶えなかった。

ロシアの革命は、全く外国との交通を絶ったので、この父子もぷっつりと音信は絶えた。シ氏は父の老齢を指折って『もう亡くなられたことであろう』とあきらめた。市川翁はシ氏が革命前線の裡にその一生を終ったであらうとあきらめた。

市川翁は二、三年前から中風症をわづらって伊豆へ引込んだ。この時である。思ひあきらめた愛児から突然の手紙は、氏をして極度に興奮せしめ、それまで殆ど言語を発し得なかった翁は突然流るゝやうなロシア語で、その歓喜の情を叫んだ。電報が行く、その返信が来る——かくしてシ氏は、国外旅行のやかましい国規のゆるしを得て飛ぶやうにして日本への旅にむかった。そして数日前なつかしの翁のもとに着いた。

シ氏は今、伊東の父の枕辺に、和服を着て、日本食をたべて、父の病篤くして淋しみの中にも、うれしさに、その日の過ぐるをも知らずに送ってゐるといふ。『日本の人になりたいです』とシ氏はいっている。

このように市川親子再会のニュースは、いささかメロドラマふうの文章で終始している。記者の筆は、世間を沸かせようと努めており、きわ物的であるといえよう。

死期を目前にした文吉にとって、アレクサンドルと再会できたことは無上の喜びであったことであろう。その後、アレクサンドルは一週間ほど二橋別荘で暮らしたのち上京し、神田三崎町に滞在後、思いを残しながらロシアへ帰って行った。

政の娘たちは、アレクサンドルとは外国語で話をし、呼びかけるときは「アレクサンドルおじさま」と云っていたという。

その後文吉は、体の左半分が不随になり、茶室の二階のベッドに臥せるようになった。部屋のすみに東京から取り寄せたフタ付の便器（おまる）が置かれていたが、はるさんの話によると、腰を下ろして用を足すその便器は、伊東ではひじょうに珍しいものであったらしい。

文吉のロシア人妻シュヴィロフと思われる女性（浅海福子氏蔵）

呼び鈴が鳴るつど、はるさんは二階へ向かい、文吉の用を足してやる。すると文吉はいつも、

——ありがとう。ありがとう。

と礼をいった。

はるさんは往時を懐かしむように、

——やさしいおじいさんでした。

と回想している。

〔追記〕

文吉の子孫宅にはかなり資料的なものがあったようであるが、現在若干の写真を除くと皆無に等しいのである。「資料の少なさは、神田の大火（文吉の孫・雪さんの五歳ごろ）で全焼し、外国から持ち帰った名画の入った土蔵を失い、関東大震災で、神田の家は再び全焼（二葉亭四迷からの贈呈本など、子供部屋の本箱にあった）、二度も丸焼けになれば、大切な物がなくなるのはあたりまえでしょう」と孫の雪さん（八十三歳）は娘の福子さんに語ったという。文吉の子孫たちは、その後も第二次世界大戦の影響を受け、引揚げ、戦災、疎開を経験し、世の辛酸をなめ今日に至っている。福子さんによると〝市川のおじい様〟の話は、母や伯母たちから繰り返し聞かされて来たということで、「この姉妹（志奈、花、雪、歌子）がいなくなれば散逸し、風化してしまうと思われ、惜しいことと思いまして、折々関係の物をもらっておいたり、話をメモしておきました」ということである。

本稿を草する上で多くの方々の教示を得た。戸田村立造船郷土資料博物館館長佐藤守一氏、伊東市教育委員会社会教育課に勤務する竹下光氏、函館市総務部史編さん室の清水恵氏、旧二橋別荘の地に住んでおられる金子能男氏、晩年の文吉の世話をした石井はる氏、子孫の飯田志奈、浅海福子両氏等から貴重な話と資料（写真）などの提供を受けた。文献資料面では戸田村立造船郷土資料博物館、伊東市立図書館、東京外国語大学図書館、東京大学史料編纂所、同新聞研究所資料センター、法政大学図書館等のお世話になった、記して感謝を表します。

平成二年　盛夏

＊　二橋季男氏は、陸中一関藩（二万七〇〇〇石）の士族出身。慶応義塾大学卒業後、日本郵船会社社員、上海の郵便局長などを勤めた。文吉の東京外国語学校時代の教え子に二橋謙（けん）（のちウラジオストック領事）がおり、その弟

市川家の系譜

- 市川兼恭（かねのり）　文政元年六月十四日生まる。明治二十二年八月二十六日没。通称斎宮、のち開成所教授職。
  - 市川文吉　弘化四年六月二十三日江戸に生まる。昭和二年七月三十日没。
    - もと　旧姓小林、安政四年十一月六日生まる。大正十五年五月二十四日没。
    - 政（まさ）　明治十四年十月三日生まる。昭和十三年七月二十一日伊東で没す。
      - *二橋季男（ふたつばしすえお）　文久三年五月二日生まる。昭和十六年八月二十三日渋谷大山町で没す。
        - 志奈　明治三十七年八月三十一日生まれ、飯田家に嫁す。
        - 花　明治三十八年十一月二十一日生まれ、関家に嫁す。一男一女あり。
        - 小太郎（夭逝）
        - 雪　明治四十年十二月十二日生まれ、山岡家に嫁す。一男三女あり。
        - 由子（夭逝）
        - 歌子　大正二年二月二十日生まれ、二橋家を継ぐ。一男二女あり。
    - 多に（夭逝）
  - とみ　旧姓加賀屋、天保元年二月三日生まる。明治四十一年一月十三日没。

ロシアにおける文吉の系譜

- 市川文吉
  - アレクサンドル・ヴァシレヴィッチ・シュヴィロフ（一八七二（明治五）年頃の生まれ？）
  - シュヴィロフ（生没年月日不詳）

飯田志奈、浅海福子両氏の教示により筆者が作成したもの。

が季男であった（飯田志奈氏談）。

参考文献

「豆州伊東真景」（伊東市の絵図）〔伊東市立図書館所蔵〕
「伊東温泉場全図」（竹下浦吉製作、昭和五年十二月刊）〔伊東市立図書館所蔵〕
「実測東京全図」（明治十一年六月、地理局地誌課製）
『官員録』（明治七年）〔東京大学史料編纂所蔵〕
山岸光宣編『幕末洋学者欧文集』（弘文荘、昭和十五年十一月刊）
『東京外国語学校沿革』（東京外国語学校編、非売品、昭和七年十一月刊）〔東京外国語大学所蔵〕
榎本武揚『シベリヤ日記』（南満州鉄道株式会社総裁室弘報課、非売品、昭和十四年九月刊）
坪内逍遥編輯『二葉亭四迷』各方面より見たる長谷川辰之助君及其追懐（易風社、明治四十二年八月刊）
内田魯庵『二葉亭四迷伝――ある先駆者の生涯』（講談社、昭和五十一年九月刊）
中村光夫『遣露伝習生始末』（東洋堂、昭和十八年九月刊）
内藤遂「我が国最初の露国留学生に就いて」（『歴史学研究』第十巻・第六号所収）
原平三『東京日々新聞』（昭和二年六月二日付、マイクロフィルム）〔東京大学新聞研究所蔵〕
Commercial Reports from Her Majesty's Consuls in China, Japan, and Siam, 1865, Harrison and Sons, London, 1866.〔函館市総務部市史編さん室蔵〕

A Brief Life of Bunkichi Ichikawa
——A student sent to Russia in the last days of the Tokugawa Government.

Bunkichi Ichikawa was born on the 23rd of the 6th month of the fourth year of Kōka (i. e. 6 June, 1847) in Edo as the eldest son of Kanenori Ichikawa, a clansman of Hiroshima, who later became a professor of German at Kaisei-jo or Bansho-shirabe-dokoro (later the Imperial university of Tokyo). In the April of the seventh year of Ansei (i. e. June 1860), he became a student of French studies and also an care-taker of French studies of the Kaisei-jo. On the 8th of the 4th month of the first year of Keio (i. e. 2 May, 1865), he was ordered to study in Russia for about five years with five other students.

The names and ranks of the students sent to Russia were as follows:

Name	Age	Rank
Seijirō Ogawa	13	an acting care-taker of Dutch studies at Kaisei-jo
Jirō Tanaka	15	no title
Hikogorō Tanaka	16	an acting care-taker of German studies at kaisei-jo

Bunkichi Ichikawa	19	an acting care-taker of French studies at Kaisei-jo
Jirō Ogata	22	an acting care-taker of English studies at Kaisei-jo
Sakuzaemon Yamanouchi	30	Hakodate-bugyosho shirabeyaku, chief of the Investigation Bureau under the Magistrate's office of Hakodate

The above-mentioned students, embarking in the Russian warship "Bogatyr" (1700t.) on the 26th of the 7th month of the first year of Keio (i. e. 15 September, 1865), left Hakodate for Europe. The ship, touching at Mitsunoura (in Hiroshima prefecture), Nagasaki, Hong Kong, Singapore, Batavia, Simonstown, Capetown and St. Helena, arrived at Plymouth in the southwest of England on the 27th of the 1st month of the second year of Keio (i. e. 13 March, 1866). Nearly seven months had passed since they left Japan.

The Japanese students left Plymouth for Cherbourg in France on the 9th of the second month of the same year (i. e. 25 March, 1866) and on landing at the French seaport, they boarded a train bound for Paris, where they arrived on the 12th of the 2nd month (i. e. 28 March, 1866). After spending a night in Paris, they started for Russia by train via Belgium, Prussia and Poland, finally arriving in St. Petersburg on the 16th of the 2nd month of the second year of Keio (i. e. 1 April, 1866).

The students were received at Warsaw station in St. Petersburg by Wadjimel, a son of Iosif Antonovich Goshkevich (1814-1875), formerly the first Russian Consul General stationed in Hakodate who had returned home prior to the arrival of the Japanese students. The newly-arrived Japanese were showed to the house prepared beforehand for them by Goshkevich, where they lived and received private lessons from visiting teachers afterwards.

On the 1st of the third month of the third year of Keio (i. e. 5 April, 1867), Sakuzaemon Yamanouchi, the leader of the students, returned home because of illness with a mission of Koide Yamatono-kami and in the following year the other four students also went home because of the collapse of the Tokugawa government. Bunkichi Ichikawa, who was looked after by Erfimii Vasilevich Putiatin (1804-1883), a diplomat and the Minister of Education, after the return home of his fellow students, received private lessons from Ivan Aleksandorvich Goncharov (1812-1891), the Russian novelist and three other teachers, studying Russian, history and mathematics. It appears that Bunkichi Ichikawa, who was detained by a love-affair with Miss Shivilov, who bore him a son, Aleksandr Vasilvich Shurilov.

In September 1873, he returned home alone, leaving his wife and son in Russia. In the December of the same year, he was orderd to serve as a seventh government clerk, teaching Russian at Tokyo Gaikokugo Gakko. In February 1874, he was appointed as a second secretary of the Japanese legation in St. Petersburg and left Japan for Russia, accompanying Takeaki Enomoto (1836-1908), an ambassador extraordinary and plenipotentiary. It was in the capacity of

vice-admiral that Enomoto concluded the treaty by which the southern part of Saghalin was exchanged for the Kuril Islands (Chishima). Bunkich Ichikawa acted as interpreter in the territorial negotiations between Japan and Russia. He returned home on 21 October 1878 with Enomoto via Siberia after staying in St. Petersburg for neary five years. In February 1879, he was relieved of the post of secretary and was ordered to serve both in the Foreign Office and the Ministry of Education, holding a concurrent post of teacher of Russian in Tokyo Gaikokugo Gakko. Shimei Futabatei (1864-1909), who later became famous as a novelist and translator of Russian literature, was one of his disciples. When Kiyotake Kuroda, a diplomat, started making tour of Europe and America on 23 June 1886, Bunkichi Ichikawa accompanied him as an interpreter, returning home on 21 April 1887. He then retired from government service and began to live in seclusion, returning to farming. He lived in Atami, Kamakura and Odawara and in his closing days he lived in Itoh city, a hot spring resort in Izu peninsula. He died of paralysis on 30 July 1927 at the age of eighty-one in the villa residence of his daughter. He lies in the grave of the Ichikawas, Zoshigaya cemetery park in Tokyo.

The author of this article was able to venture into the unknown aspects of his later life thanks to his descendants. This article was written to the memory of the late Mr. Bunkichi Ichikawa.

T. Miyanaga

Tokyo, 30 August 1990.